哲學研究　第四百三號　第三十五卷第五冊

自立心交の教育

——吉田松陰の教育——

下程勇吉

一

志士吉田松陰と教育者吉田松陰とは盾の表裏を成すものである。前者の本質的顯現が後者であり、後者の內面的根柢は前者にある。志士としての吉田松陰を檢討するとき、必然に教育者としての吉田松陰が問題とならざるを得ぬのである。志士吉田松陰くらゐ教育の時務的緊要性のみならず本質的重大性を力說した者も少く、また彼くらゐ天性教育家的性格をもつてゐた志士も稀である。歷史の激動いよいよ加はる狀勢下、松陰は政治部門における人材登用の必要を說くとともに、その前提をなす人材養成、教育の重大性を機會ある毎に力說したのであつた。たとへば安政二年四月の末、當時向後十年間は外國と事をかまへることなしといふ時局判斷に立脚してゐた松陰は、土屋蕭海宛に次の如く書いてゐる、「呉々も天下の大機、當に十年の外に在るべし、努々御ゆだんこれなく、有志の士御仕立成されたし、可祝云々。」すでに嘉永二年二十歳の松陰は、「古より英主良將にても必ず賢才を待ちて事をなし給へば、治亂ともに用士は主將の急務、萬機の根本なり」と說いてゐる。また安政二年の獄舍問答には、「砲よりも艦よりも善きものは

兵機を辨へたるの士なり」とある。まさに兵經史相卽の立場よりして、行兵・立國・教育の三一的聯關を力說した松陰によれば、國政の窮極根柢を培ひ生かすものは人材の養成と登用以外にはないのである。この見地は政治・外交・經濟・教學等人倫百般の事に深き關心をもつ志士として吉田松陰が最後まで堅持して渝るところがなかつたのであつた。安政五年末の學校論は、「人材を衆めて國勢を振ふは今日の要務たり」と說き起し、また刑死の運命定まつた十月二十日の入江杉藏宛の書にも「天下の奇材英能」を養ふ大學校設立案を說き委曲を盡してゐる。終始教育家的情熱をもつて貫いた松陰においては、かくて教育は第一に時務そのものの要請に基く緊要事である。

しかし永遠と時間とを結ぶ志に生きた志士松陰においては、「萬世の定」と「一時の定」とは相切する。すなはち教育の次元においても、人材養成は一時の要務であるばかりでなく、國家百年の計が教育の重大性を直指するのである。「文武稽古萬世不朽の仕法」を上書した嘉永四年の一文には「良法美政人心に浸漬仕り候て風俗を成し候へば、則ち萬世不朽の策と存じ奉り候」とある。「禮儀廉恥の風を成し利を恥ぢて義に進む」政教こそは、一國の國風の根本たるべきであり、これこそ萬世不朽の定たるべきものである。教育が深く國本に培ふものであるべきことは、松陰が歷史において夙に學んだところである。嘉永五年八月の一文に曰く、「僕、紀を讀み、その學制を載するに至り、指をかがめて之を數ふ、曰く軍學、曰く兵術、曰く刑律、曰く紀文、曰く天文・地理・度量・築城、曰く某國某國の方言と、乃ち嘆じて曰く、これ以て人才を成就し而してその國を强大ならしむべきなりと云々。」學制完備し教育の實あがれば、國運の興隆は期して待つべきものがある。教學は「一時の定」のみならず「萬世の定」そのものに屬するものとして時務的であるとともに原理的なる重大性をもつ。學あり教ありてこそ、國家の永遠なる根柢が固められる。しかも學と教とは二にして一である。上述の上書に、「苟も學なければ則ち已む、ただ學これ在れば則ち人材以て長育すべし」とあるとともに、「蓋し學の道たる、已が才能を衒して人を屈する所以にあらず、人を教育して同じく善に歸せんと欲する所以なり」と講孟餘話が說く所以である。すなはち經學的立場は教學相俟ち教育が國家百年の

計を成す所以を教へるのである。「身を修め家を齊るを先務とするは、事迂濶なる如くなれども、その法子孫に傳はり、幾世を經ても動搖せざるのみならず、益々興隆する者なり」と說く講孟餘話と年を同じうして武教全書講錄もその「子孫の教戒」において、「宗族鄉里の子弟に至るまで、吾が丹心精血を瀝ぎて、その肺腑に徹し、その天性の良智を感發せしめ、彌次に繼ぎ繼ぎて千萬世絕ゆることなき」を期してゐる。道と理において志ある大丈夫を育成することは國本を培ひ社稷を不朽ならしめる所以である。教育こそは國家の存立そのものにかかはる根本問題である。國家百年の計に志ある限りのものは教育を重大視せざるを得ぬであらう。經學的立場より國家百年の計を思ひつねにいはゆる廟勝論を構想した松陰は教育をその學の根本綱領の一つとしてゐたのであつた。

かくの如くその志士的立場の論理的必然性よりして教育者であつた吉田松陰はまた生來稟得の資質よりして教育者であつたのであつた。師弟に對して始終異體同心の誠を致して渝らぬその人柄こそは彼をして教育者として達せしめた所以のものである。松陰は師友に對し切々至誠の情をもちつゞけるとともに、門下に對しては至れり盡せりの教育的配慮をもつてのぞんだのであつた。實に師弟ともに「その神傍に在り」といふ大和心交の深みに松下村塾の教育は生れたといはれる。安政六年二月高杉晉作宛の一書に曰く「僕は君に負き父に負くの人、死を求むべきの人、萬事念なし、但だ朋友の情甚だ深し、良朋親友寢寐忘るべからず云々。」この情に厚く愛に深き松陰の稟質に裏付けられた志士教育こそは、吉田松陰の教育の立場であつた。安政六年二月の書翰に曰く、「僕友義甚だ厚きも他に非ず、國のために命を抛ち吳れる人共なれば、氣體血肉皆吾れと連接するを以てなり云々。」

その志天下國家にあるが故に、相つながり相結ぶところに、友義に厚き教育愛が松陰の志士教育にたえず新しい血液をおくつてゐる。まことに國を思ふ志士にとつては、青少年を愛してやまぬ心から教育愛に生きることはその天職である。兵經史の一門相卽的立場に立つ松陰においては、志士的性格と教育者的性格の二元性を語る餘地はない。まさに「良友を得て奬勵切磋し肝膽を吐露する」教育者的活動と「互に天下の大計を論じ身を以て大難至險に當らんと

する」志士的活動とは松陰において二ならずして一である。志士松陰はまことに教育者的であり、教育者松陰はまた志士的であつた。松陰の天下國家への志は人材教育への志において具體化せられる。時として志士松陰の志と願とは志あるもの一人にかかることすらあるのである。安政三年の對默森應醜中の一文に曰く、「もし僕幽囚の身にて死なば、吾れ必ず一人の吾が志を繼ぐの士をば後世に殘し置くなり云々。」この章句に彼自ら圈點を付せるところよりするも、松陰の志が那邊に存するか知るべきであらう。その志に至りては松本一邑に一二の奇傑を生じ、以て忠孝の首、天下の唱たらんことを欲すといふのが、當時幽囚の身であつた松陰の唯一の念願でもあつたのである。更に安政六年八月二十五日には堀江克之助に與へて、「吾が苦心水の泡となるとも、後起の士二の手三の手これあるべく候へば、天地あらん限りはさまで嘆ずべきに非ず候」と語り、また諸友への永別の書には、「諸友蓋し吾が志を知らん、爲めに我を哀しむなかれ、我を哀しむは我を知るに如かず、我を知るは吾が志を張りてこれを大にするに如かざるなり」とあり、また留魂錄も「吾れの祈念を籠むるところは同志の士甲斐々々しく吾が志を繼紹する」ことにあるとしてゐる。

死の瞬間までかゝる志に生きんとした松陰にとつては、安政元年の冬從弟玉木彦介に教へた如く「深く自ら激昂し嘐々然として古人を以て期となす」志士的自己修練の道が自他の教育において重大であつたのであつた。門下の俊英吉田榮太郎の語つたところによれば、松陰は「頭のじんじんすることばかり申聞かせた」といはれるが、まさに人は己の全存在がゆり動かされる全人格的震蕩體驗において志を發すべきである。士規七則を要約する三端の第一則に「志を立て以て萬事の源となす」といはれてゐるが、志を發しいはゆる瞑眩的體驗に住するものにして眞に志を存するの士である。滕文公章上の首章に出てくる書經說命篇の「藥瞑眩せずんば、その疾瘳えず」の章句に言及して曰く、「此言實にこれ吾輩の良藥これに過ぎることなし。但し此の藥瞑眩する所以に至ては、眞に志を立つる者に非ざれば、知ること能はず。請ふ、試みにこれを言はん。今常人の通情を察するに、善を好み惡を惡むは、固なれども、大抵十

人並の人にならんと思ふ迄にて、百人千人萬人に傑出せんと思ふ者更に少し。堯舜文王は萬世に傑出する人なり。今にはかにこれを師とせんとするは、瞑眩の藥に非ずや。滕は五十里の小國にして、齊楚强大の國に間れり。今乃ちこれを謂て善國となすべしと云ふ、亦瞑眩の藥に非ずや。然れども常人の情として、自ら行ふを勸めず、好んで無當の大言をなし、聖人となるも、善國となすも、茶漬を食ふ如くに言ふ者多し。亦烏んぞこの藥の瞑眩を知ることを得んや、吾輩自ら反して、是を思ふ時は、汗背赧面自ら容るゝ所なし、これ實に吾輩の良藥なるかな云々。」先哲に直到せんとし、また二大强國の間に自立の實をあげんとするが如き、いづれもその志すところ瞑眩自ら失ふ如きものがある。こゝに松陰がいはゆる頑質の士に深く期待する所以もあるのである。（「理想」第二一八號拙稿參照）

「氣節行義は村塾の第一義なり、徒に書を讀むのみに非ざるなり」となす松陰のめざすところは、何よりも先づ國家天下のことを我がこととする卓然自立の志士の敎育である。己の眞骨頭より發する志を以て天地の間に立ち得る大丈夫こそは松陰が何ものにもまして尊重し愛惜してやまなかつたものである。東行前日記の如きはこのことを語る尤なるものである。「期す汝十年の後、堂々たる一丈夫」とは岡田耕作に與へた留別の辭である。また藤野等三門下に與へて曰く、「子大（作間忠三郎）至り、具さに三生及び林榮の讀書頗る進むことの狀を語る。僕が喜び知るべきなり。男兒斯の世に生れて、醉生夢死一として稱道すべきものなければ、啻に君父に辜負するのみならず、將に何を以て天地に俯仰せんとするや。今僕將に東に往かんとす、歸來期なく、復た諸生を見るべからず。諸生厚く自ら淬勵し、忠孝を天地に立つれば、乃ち學ぶ所に負かざるなり。目今吾が黨頗る志士あり、吾れの去る、未だ悲しむに足らざるなり云々。」吾が黨頗る志士ありといひ得るところに、生還を期せざる旅に出立つ松陰の望もかかつてゐたのであつた。

養賢堂を興し國家の樞機に參ずる人材を國家的に養成するを以て終始その持論とした松陰が、その自ら率ゐる松下村塾に期待しまた自己自身任ずるところは決して小ではなかつたといはれる。天下動搖し義氣地を掃はんとするとき、天地の道に卽して國家を維持せんとする耿々一片の志こそは、松陰の志士敎育のすべてに睛を點ずるものであつ

た。「常に謂へらく、吾れ同志と力を戮せ心を協へ、正議を村塾に唱へ、以て國脈を培養し、天下を維持すべしと、自ら信ずることかくの如し」「今を生して古に反し、衰を回らして盛に復すこと、茫々たる八洲、吾黨舍きてそれ誰れにか望まん。」「吾が儕報國の志、滿世の人知らず、則ち人知らずと雖も、蒼天まさに之を知らんとす、直だ區々の身をもつて、去つて神州の基を築かん。」その表現に封建的色彩あるも、「人存すれば國隨つて存す」となす一念に生きた松陰の自ら持するところが窺はれるであらう。かゝる一念に發して自ら求め學び「心腸の工夫」を重ねることを一日として廢しなかつた松陰はまた青少年のうちに宿る長所・美質・特性に對して極めて鋭き感受性をもち、これを「深く愛し」推重し、よく自重自愛自學自勵の道に人々を導いたのであつた。各個人の個性を凝視し一人の志を開發する至誠に終始するところに、粗大放慢なるいはゆる志士と天地逍遥する松陰の立場がある。安政五年四月小國剛藏に語つた如く、多人數中に一人か二人志を起すよりはじめ、春夏秋冬各、一人志を發して千萬人に及ぶ至誠不息の道こそは「急ぎて急がるるものにこれなき」教育の道にほかならない。また安政六年正月に說く如く、士は精なるを貴び衆きを貴ばず、有志の士は募りて求むべきにあらざることは松陰のつねづね深く知るところであつた。まさに「松本一村より長門、長門より山陽道、山陽道より日本國中へ押出で忠孝節義の風俗を引起し」以て道を貫かんとした松陰は眼高手低先づ手近の獄囚から手をつけて志士教育圈を擴大せんとしたのであつた。講孟餘話に曰く、「先づ一身一家より手を下し、一村一鄕より同志同志と語り傳へて、此の志を同じうする者日々盛にならば、一人より十人、十人より百人、百人より千人、千人より萬人、萬人より三軍と、順々に進み進みして、仁を忘ず者畫に寥々ならんや、此の志を一身より子々孫々に傳へば、その遺澤十年百年千年萬年と愈〻、益〻、繁昌すべし云々。」

二

こゝに各人各個をしてその本來の面目において國家社會の柱たらしめる教育が何より重大となるのであるが、各人

が本來の自己になるために第一に必要なことは自ら志を發し自ら心田を開く不退轉の行に止まることである。まことに己の眞骨頭を求得せんとするところに、學の工夫はその緒につくのである。ひろく心田開發は自家の心田開發にはじまる。自家の心田こそ第一着手の地である。己の誠に徹して己を超えるところにのみ、自他不二の誠に進み天人一貫の德に歸し得る。自家の心身において眞に自他を超える一なるものが生きて來る自然の風光なきところ、眞の教育はあり得ない。努め努めるの間樂み盡きざるものが自己の裡に生きてゐるところにのみ、已むに已まれぬ教育的努力が過化存神無爲にして化す至誠の一境を現じて來るのである。このことは求理求道の努力を一日として舍てなかつた松陰の教育者としての一生が歴々として示すところである。己の裡に燃えるものをもたぬものが如何にして人に火を點じ得よう。何よりも先づ「吾が心腸の工夫」が大切なのである。早くも嘉永二年五月の講義存稿が示す如く、松陰が孟子のいはゆる「賢者以其昭々使人昭々」の義を重んじ「己を正すの學、勸めずんばあるべからず」とした所以である。まさに「先づ己を正して而る後に人を教ふ」るが教育の根本義にほかならない。安政三年の默霖對決書に明かなる如く、「學問を勉め心腸を磨し他日爲す事あらんと」する松陰は獄中の第一要務を「吾が心腸の工夫と親戚の教諭のみ」とし自ら究めて自づと他に及ぶ教育的立場に立つたのであつた。

己の呰々を以て人を昭々ならしめんとするが如きことが教育本來の道に遠きはもとよりであるが、それにもまして己の才能を衒して人を凌がんとするが如きはまた教育の道に悖るも甚しきものである。何よりも先づこの現在の一瞬の己を誠にし眞實にし我身の德性を尊ぶことにおいて自他を一に貫くものにつながるべきである。自ら勞し己の至らざるを知りて攻めてやまぬとき、心を盡して共に學ばんとする愛の心が教育の根本を決定する。自學自昭自ら苦しみ學んでこそ、相手の立場に思ひを及ぼし共に學ばんとする教育愛も可能となる。松陰は少年のため孝經の素讀を行ふにあたり「自分自身が師に習ふ時の氣持でゐる、さうでないと子供は覺えず、自分も腹が立つ」と兄に語つたといはれてゐる。

己を昭々たらしめ我身に行ふところより、教育の第一歩が開ける以上、師たるものの道は決して容易なものではない。ここに松陰は講孟餘話において「己が爲にするの學」を唱へ、「妄りに人の師となるべからず」と說くのである。曰く、「人の師とならんことを欲すれば、學ぶ所己が爲に非ず、博聞强記人の顧問に備るのみ、而して是れ學者の通患なり、吾輩尤も自ら戒しむべし。凡そ學をなすの要は己が爲にするにあり、己が爲にするは君子の學なり、人の爲にするは小人の學なり、而して己が爲にするの學は、人の師となるを好むに非ずして自ら人の師となるべし、人の爲にするの學は、人の師とならんと欲すれども遂に師となるに足らず云々。」更に松陰は師道衰廢の根源に關して次の如く說いてゐる、「大抵師を取ること易く、師を撰ぶこと審かならず。故に師道輕し、故に師道を興さんとならば、妄りに人の師となるべからず、又妄りに人を師とすべからず、必ず眞に教ふべきことありて師となり、眞に學ぶべきことありて師とすべし云々。」「師道を以て居らざる」ものこそ、眞の師である。この點に關する反省は年とともに切實となつてゐる。この點に松陰の教育者的成熟が見られると同時に彼の志士的實踐が眞劍となつたことが知られるのであるが、安政五年六月の久坂宛の手紙には、「己れを成して人自ら降參する樣にせねば行けぬなり」とも「只だ自力を强くして人自ら來る如くすべし」とも當爲をかかげながら、松陰は「力あるものの余に服したるためしなし」と告白せざるを得なかつたのである。自他の心田開發に全力を致すが故に魂の底よりこの告白を禁じ得ぬところに、謙虛にして人間的眞實に充ちたる教育者吉田松陰の眞面目がある。

實に自省自反こそは教育の第一點である。その自省に强く公なる點に、松陰の教育者的性格の尤なるものがある。「己れの罪を聞きて人の罪を論ずることは吾れ死すともなさず」と云つた松陰は、天野清三郎の語るが如く、「己れの罪を明かに言ひて人に訓誨し」たのであつた。かく己を深く省みる松陰は己の意を迎へる輕薄才子よりも直言諫爭を辭しない硬骨の士を推重したのであつた。「迂ふ者の益或は合ふ者に過ぐ」の言ある所以である。安政五年二月高杉晉作の直言に感謝して曰く、「足下の一言これを沮むことなかりせば、僕殆んど大事を誤らんとせり、事過ぎてこれ

を思へば、大夢の一覺の如し、僕何の感かこれに尙(なほ)へん、……近日の言の如きは、僕誠に聞くを樂しむ所、而して肯へて自ら改むるに吝かならず、足下僕の爲めに忠告せしこと、從前一に非ず、而してこれ最も危機たり、ここを以て特に書して謝を言ふ、足下願くは棄てず、更に誨ふることあれ云々。」かく他の直言を歡び迎へて端的に反省する松陰はまた他に直言して自省に導く人であつた。直言するのは高杉のみでない。久坂も亦英雄の術數乃至巧詐を以て我等を遇するなかれと直言するのである。これに對して松陰は、「吾れ英雄に非ず、安んぞ術數あらん、一言も意(こころ)合へば許すに知己を以てし、一言も違忤せば立ちどころに罵詈を加ふ、罵詈一過せば、亦復た舊の如し云々」と答へる。侃々行々怒るべくして怒り罵るべくして罵り餘憤をとどめざる卒直明快なる心情よりして相互につながるものあるが故に、相互に直言しまた相共に反省するのである。講孟餘話にも「君子陽剛の德」を次の如く說いてゐる。「凡そ人に交はるの道、怨怒する所あらば、直ちにこれを忠告直言すべし。もし忠告直言すること能はずんば、怨怒することなきに若かず。もし然らずしてそれを胸中に藏匿留蓄して時を待ちてこれを發せんと欲するは、陰柔小人のする所にして誠に臆病といふべし。君子の心は天の如し。怨怒する所あれば、雷霆の怒を發することもあれども、その事解くるに至りては又天晴日明なる如く、一毫も心中に殘す所なし、これ君子陽剛の德なり云々。」しかもかく理を正して爭ひに墮せざる陽剛の德を說く松陰は、また徒らに人の心を刺戟することを避け、「余は穩かに人を諭し自ら悟り自ら省みる所あらしめる樣に心掛くる者なり」とまで語る心細かな心理學者でもあつたのである。

三

かくて自他ともに深く己を省み己を昭かにし己の性に徹しこれを長養するところに、敎育本來の道が成立つ。敎育は自省に發して己の個性の發見と長養の方途に於て過化存神よく淸明大和の人倫究極の道に參ぜんとするものにほかならない。各人に存する性の深みを洞見しこれを敬重し開發し長養すること、宛も親の愛兒に對するが如くして、性

を知り養ふ教育の立場が可能となる。教育は「養」の一字に盡きると考へた松陰は、その心常に門下と共に在つたのであつた。

「不中不才の人を繩にて縛り杖にて策うち一朝一夕に中ならしめ才ならしめん」とするが如きは誤れるも甚しい。「仁義道德の中に沐浴させて覺えず知らず善に移り惡に遠ざかり舊染の汙自ら化するを待つ」養性の道こそ、政治と教育の要諦にほかならない。かく性を長養する道においては、賢愚能不能人々の器量と稟質によりその間に自づと異る教化方途がなくてはならない。「君子の人を教ふるは、人君の人を用ふると異る事なし。人を用ふる法、大才能の人に始めより大任重職を命ず。而してその人亦自ら奮厲し大いにその忠思を舒ぶること、猶ほ時雨の化するが如し。もし大才能の人を瑣事賤役に役使すれば、その人必ず厭怠してこれが用たらず。教も亦然り。又不才無能の者に大任重職を命ずれば、その人困死せざれば勞病すべきのみ、これ亦教と同じ云々。」その個性を明確にとらへそれに適する養性の道をとるは教育の第一歩であるが、養性の道は無限に深き鍛練の道にほかならない。教育は個性を開發しこれを長養するきびしき陶冶錬成の道である。幼にして父叔よりきびしき鍛錬教育をうけその間に體得するものがあつた松陰は、また自勵の士を歡び迎へ鍛錬の道を重く視たのであつた。一筋に學ぶ志が松陰の教育精神を貫いてゐるのである。安政五年一月二日十歳の岡田耕作が他の門下に先んじて孟子の教授をうけに來たとき、また同年端午の日も學を修めに來たとき、その都度松陰は欣然これを迎へ文を草してその志を勵ましてゐる。形式的に年賀の禮をとるよりも修學の實を少しでも擧げることが松陰の本懷にかなふのである。上例に類することは他にも一再ならずある。嘉永四年六月兄宛の手紙には、世木熊太郎よりの來狀に形式的見舞のみでその學業の近狀が一向書いてないのを不滿として、次の如くいつてゐる、「尤も一概に斯樣申し候はば、人の親切を無にするにも至るべきか、併しながらこれらの處提醒いたさずしては、學問の進益有之間敷候、畢竟學を爲すの氣力光燄に乏しく、世味に濃やかにして滔々乎として俗輩に陷らんのみ云々。」また同年九月の手紙にも、一友人に對し「空しく寒暄を述べ候迄の書は斷々乎として往

復仕らざる約束」をした旨が語られ、同年末の一書にも、「諸位の書なきこと已に久し、意ふに、强勉問學、復た餘力の他事に及ぶなからんのみ、喜ぶべし、畏るべし云々」と書かれてゐる。

學に進み勵む門下の姿にもまして松陰を悅ばせたものはなかつたのであつた。安政五年末再度の入獄に際し門下一同言葉もなかつたなかに、「非凡の語」として松陰の心をうつたものは「今より當に勉勵すべし」といつた少年品川彌二郎の一語であつた。「三人切偲勸學志の挫けぬ樣に、氣の浮ばぬ樣に、これありたく候、古人の往事を思うて負けぬ樣に心懸くべし云々」とは、安政六年三月野山獄より門下を勵した語であるが、つねに古人・先覺の言行を鑑として自ら省みその志を新たにした松陰はことに人生の大事に臨んでは己の進退が古人に對して恥づるなきやを省み己を勵したのであつた。嘉永五年の「猛省錄」、ことに安政六年東行直前の「照顏錄」の如きはかかる精神から生れた述作である。

かく自省自勵の行に徹して性を深める道においては、名のみありて實なく順境に安んじ厚祿に爲すなき如きは厚顏無恥この上もなきものである。この點に關しても夙に封建制の批判者であつた松陰はまたここでも「頭のじんじんすることばかり」語る教育者であつたのである。すでに弘化三年十七歲にして松陰は次の如く書いてゐる、「それ農工商賈にしてその業を成さざる者、十に一二もなし、豈に彼れ皆才且つ知ならんや。士たる者にしてその道に精しからざる者、十に蓋し八九あらん、豈に此れ皆不才不知ならんや。蓋し亦故あるのみ。蓋し士たる者は祿を公上に食み、耕さずして粒米以て腹を充たすに足り、織らずして布帛以て身を蔽ふに足る、故に生れては則ち逸し、復た憂勤の心あることなし、これその道に精なる能はざる所以なり。彼の農工商賈は則ち然らず。一たびその業を墜さば、則ち仰ぎては以て父母に事ふるなく、俯しては以て妻子を畜ふなし、故にそのこれを爲すや志を致す、これよくその業を成す所以なり云々。」嘉永元年の上書にもまた、高位にあり大祿を食む者が富貴逸樂に耽りその志落つる現狀を指摘し、下級小祿ながら精勤篤實なる者を表彰すべき旨が進言せられてゐる。いはゆる沃土の民の材ならざることが松陰

の問題となつたのであつた。「厚祿重俸の士は君恩を感ずること一層深く、文武の業固より賤士に拔出すべきことなるに、却つて左もなきこと、余固より怪しめり云々」とは、松陰の鋭き頭腦に映じ來つた矛盾そのものであつた。後年松陰が草莽崛起の士にすべての望を囑した所以である。ことに下級微祿の士分に屬し兵農併行の實生活的鍛錬の間に成長した俊秀が彼の門下の大部分を占めてゐたことは、僅か二年半を出でぬその教育の驚異的成功の重大なる一因をなすものである。もとより微祿草莽の者が必しも賴むに足りる者ではない。要は貴賤上下といふ外面的區別よりも勤惰儉奢の別を生み出す志そのものが問題なのである。その志自然と落つるものあるものとして、順境は人の戒慎し精進すべき境位であり、その志を鐵石の固きに鍛えぬくものとして、逆境なほ感謝すべきものがあるのである。安政五年正月六日の「狂夫の言」に曰く、「天の材を生ずるや、貴賤を別つなし、然れども吾れ成童而下の書を讀む者を歷試するに、愈〻貴きは愈〻鈍にして、愈〻賤しき者は愈〻敏なり、年未だ弱冠ならざるに、敏なる者は常に敗れて諂を爲し慢を爲す、鈍なる者は或は進みて忠を爲し勤を爲す、これその大數なり、蓋し賤者必ずしも材なるに非ざれども、窮しては善く思ひ、思ひては善く材となる、貴者必ずしも不材なるに非ざれども、逸しては善く怠り、怠りては善く不材となる。」すでに嘉永三年九月の末郡司某に宛てて「もしも右樣のせり合ひもこれなく、事々順に行はれ候はば、足下へ平伏するもののみに相成り、自然惰慢の氣生ずまじくとも無之云々」と「習坎して心享る」の理を說いてゐるが、翌年六月の叔父宛の手紙では「得志中の不幸」なるものを語つてゐる。すなはちその鍛錬の度において、叔父の子息等の育ちは我々兄弟のそれに及ばず、また我々自身の育ちは父叔のそれに及ばぬであらう。ここに目下順境にあるものの「得志中の不幸」なるものがあるのである。まさに「安きに居て危きを忘れず」壯健堅忍といふ身心兩面の鍛錬が要請せられる所以である。また嘉永五年五月には友人土屋蕭海に對し、鄕里に「戻ると、足下が人を目下に見る故、學問は上るまい」と警告してゐる。安政六年四月の妹宛の手紙にも、實家の隆盛にもかかはらず「どうも先の先が氣遣ひでたまらんから、始終僧古場へかがんで人の知らぬ所では獨り落淚した」旨が語られてゐる。

また東行直前の日記その他にも、「今吾が兄弟行漸く將に奈奢の風を萌さんとす、誠に惧るべきなり云々」と宗族への弊告が語られてゐる。後年師の精神をうけて松浦松洞が「千金の家哲人少し」と詠んだのも偶然ではない。「至安は至危を伏す」となす松陰は、早くより「險阻艱難ほど大業を成すに宜しきものこれなき」理に徹し、この理は大にしては國家全體、小にしては個人に至るまで妥當すると考へたのである。かく「得志中の不幸」といふ論理を始終語る松陰は、積極的に進んで絶對絶命の倫理を說くのである。すなはち進退兩難絶對絶命の局面こそは眞に人を人たらしめる無二の敎育的機會であるとまで考へるのである。忠孝の岐路に進退窮せる品川に關して、松陰は「此の六ケ敷き所を處し慣れて置かねば、天下の難事は中々此の段にあらず」「これらの事も皆玉成の資なり」と敎へるのであるが、入江母子に關して心緒惱亂その極に達したとき、松陰は「此れに處する能はずんば、何を以て丈夫と爲さん」と己の心をつかみなをすのである。つねに身を至難の地におき心を鍛へることがその志よく金剛不壞なる大丈夫を生み人をして「不朽人」たらしめる。松陰は「不緇不磷の人にてなくては申し難し」として高杉晉作にいはゆる「遠大の論」を說いたのであつた。すなはち、一通り學を修め君親の覺えめでたきを得たる後、正論正義を唱へて失脚し、自ら不遇恬退の人となりてひたすらに學を究めれば、十年の後「眞人物」となり大いに爲すあらんと、松陰は高杉に敎へたのであつた。この言に接して後まさに十年獄に下つた高杉は師の言「猶ほ耳にある」を覺え、一日として書を讀まざるはなく、その間「余の行ふ所先師の言と眞に符節を合す」るを覺えたのであつた。幽明境を異にして十歲の後なほその全人格をゆすぶり「不朽」に誘ふその言葉こそは、まことに「遠大の論」の名に價するといはねばならない。多くの門弟中逆境恬退裡「不朽」に參ずる道を示された唯一人の門弟たるにふさはしく、高杉は明日はかられぬ身を忘れて學びに學び、或は默讀沈思、或は高吟長嘯、よく死生の間に談笑する鐵石腸の一境を窺ひ得たのであつた。この點において高杉はまさしく師の魂に直ちにつながつてゐる。その死前の記錄の示す如く、松陰自身もまた四面楚歌の獄中壯子を侶として死生の間に談笑する鐵石腸に徹せんとしたのであつた。ここに至れば、いはば死生の間

に死を超える境地が開けて來るのである。この境地を師より學びとつた直系の諸門弟が歴史的維新の導火線となつたのも偶然ではない。死して「不朽」に參する歴史的實踐の立場こそは松陰の志士教育を規定する窮極の根據であつたのである。

四

教育は觀念的遊戯でなく體認的實踐である。あくまで心身一如的鍛錬道が尊重せられる所以である。讀書抄錄を重んじ一日として學的啓發を廢せざるとともに、擊劍作業等を課し筋骨の發達をはかり、以て心身一如的に全き人間の形成を意圖したところに、松陰の教育の具體性がある。ことに鍛錬を重んじた松陰は勤勞教育に力をそそいでゐる。人は勤勞において全人格を統合し眞に學ぶのである。塾生は塾の建築に協力し田を耕し草を除き米をつくの間師と友との心のふれ合ひを深めつつ相共に學んだのであつた。安政五年二月二十八日の手紙は「村塾增築の議初まる」旨を久坂に報じ「此の節土砂搬運は皆塾童なり、雇人は一人もなし、大愉快、云ふても盡期はなし」とある。師の顏に壁土を落して師弟ともに興じた情景もこの間の出來事である。こえて六月二十八日には米を舂きながら會讀する旨が久坂に報じられてゐる。また「村童を集め少々塾畑出來候」とあるが、冷泉雅二郎（天野御民）の記するところによれば、師弟ともに草を除きつつ談は讀書の方法又は歴史に及び、「門人愉快にたへず、これを樂しみとした」といふ。共同作業の間相互に魂にふれつつ學ぶ各〻は皆「よく俗流に卓立する」有志の士である。とくに「疾病艱難には相扶持し、力役事故には相勞役すること、手足の如く然り、骨肉の如く然り」と云はれるところに、卓然自立にして大和心交、自主協同の學風は深く養はれたのであつた。行學一體にして自他協同の實をあげる勤勞教育についての松陰の見解は、安政五年中頃の作と推せられる「學校を論ず」の中に「學校作場說」として說かれてゐる。空疎に陷り易き讀書人の學を實のりあらしめるために「作場を起し之れを學校に連接し」工作技術を體得させるといふのである。この學校作場

說は彼の西洋技術觀とともに先驅者の卓見として許さるべきものである。まさに心身一如的勤勞の間交はりを深めつつ各自が自得し發明するところを語り合ひて相互に啓發し相携へて學道に徹する清明大和自主協同の學風こそは、安政五年六月の「諸生に示す」の一文に明かなる如く、松下村塾教學の根本精神をなすものであつた。「村塾廬を圍む徹宵の談」に大義に生きる卓然自立の志を深めた門弟は、師友ともに米を舂き草を除く勤勞の間に大和心交の道の深みを體得したのであつた。

各己が己の眞面目を現じて勤勞するの間大和心交の道に徹するところに、勤勞教育の眞髓がある。清明にして大和、卓立にして心交、この人間の大道を實にする有力なる一方策が勤勞教育として取上られたのであつた。意必固我徒らに他と爭ひ人を凌ぐ「欲」の立場と異り、清明大和の立場は一方であくまで理義に透徹するものがあるとともに他方相互の間に深い情の交流があるのである。剛にして努めるも爭はず、理を究めるも情の深きを失はぬところに、松陰の教育的立場の獨自性がある。あくまで鍛錬を忘れず克己禮に復する間によく「人情の自然」の深みを現ずるのが、眞の教育的立場の本質である。鍛錬を一日として忘れぬ松陰に「凡そ事人情に原づかずんば何ぞ以て成るあらん」の語あるは注目に價ひする。松陰においては倫理も實踐も深く「人情の自然」につながつてゐる。自ら禁酒禁煙し門下にもこれを望むが、「下戸の心を以て上戸の心を料る」の慮を忘れぬところに、教育者吉田松陰の人間的風格がある。意志的鍛錬を重んじ「頭がじん〳〵することばかり申聞かせ」ながら寛濶溫藉の風格を失はぬのはひとり純粹人間性の深みに徹する人格において可能である。この深みを措いて人間教育の源泉もあり得ぬであらう。

眞に理を究め志を强くして情の深みを現ずるところ、人間は鍛錬に徹して自由となる。道と教の至極は自由であり眞樂である。徒らに窮屈なるは道に至れるものではない。從容自得如何なる地においても安んじ樂しむところある正命把持の一境こそは、松陰もたえずめざしたところであつた。すでに弘化三年頃の一文が空行く雲において無心從容よく人を化する君子の風を偲んでゐるが、講孟餘話もまた道を樂しみて人の勢を忘れる賢士の立場に言及して次の如

く說いてゐる、「大抵賢者の樂しむ所は道のみ、好む所は善のみ、勢位利祿一も心に入ることなし、忘るるとは厭ふに非ず、慕ふに非ず、その間に意あることなきの謂なり云々。」蕭々然として自得無欲、從容無心にして化する寬濶和煦の風格あればこそ、その敎へるところよく人々の魂の底の底にまで滲み通るのである。磊々落々人を待つに城府を設けず瀝肝吐膽一見の故の如きものがあつた松陰は、繩墨を設けず區々たる禮法規則に拘はらざるを旨とし、「互に寬容致し隔心これなき樣」にする心より門弟に臨んだのであつた。寬容親和が共に學ぶ者の在り方である。單に理を以て爭へば天下一人として全きはあり得ないのが人間そのものの性格である。嘉永二年二十歲の時の武敎全書用士篇の講章には「小過を以て人を棄てては、大才は決して得べからず」とあり、安政二年の野山雜著には「一時の罪何ぞ遽かに全人の用を廢することを得んや」とある。これらには松陰自身の體驗の反映も考へられるのであるが、つねに全體的人格統一の立場に立ち人間自然の情を忘れぬ松陰は大和心交の人倫の道を說いたのであつた。またかかる情の深みより松陰の藝術的創作も生れたのであつた。松陰は一方では詩文風流の道が徒らに玩物喪志の弊を釀し出すことを極力戒しめながら、他方では蹋天踏地の罪囚や心鬱しやすき女性に對しては作歌作句をすすめ、その情操敎育の一助に資せんとしたのであつた。（拙稿「理想」一五八號所載、「吉田松陰の學的態度」）

五

理を究め志を勵し情の深みを忘れざる松陰の全人敎育の立場はその敎育を上下內外城壁を設けざるものとする。彼の敎育活動は社會の最上層より最下層にまで及ぶのである。實に安政五年五月の對策・愚論の如きは、梁川星巖を介して、乙夜の覽に供せられてゐる。再三の藩主への上書は明かに人倫敎育的見地を以て貫かれてゐる。その切々たる憂國の赤心は上層部に反映するのみならず、下は牢獄の暗黑にまでその光を投げるのである。一室五大洲をはかり前後三千年を開かんとする氣宇に住しながら、獄中敎育者として至誠を致したところに、松陰の面目がある。醫者は醫

者の立場より事をはじめ、囚徒より志を起すべしとした松陰の第一着手は獄中教育であつた。安政元年下田において同志金子とともに兩人膝を交へて一疊敷の獄室にゐる狹さに苦しみつつも、獄卒に對して松陰は教を說いてゐる。「人倫の人倫たる所以、夷狄の惡むべき所以を日夜高聲に稱說す、獄奴蠢爾と雖も亦人心あるもの、淚を揮つて吾が輩の志を悲しまざるはなし云々。」かく下田獄における己の動靜を描いてゐる松陰は、ついで江戸獄に至る途上の己の學措を次の如く語つてゐる、「さて宿にて番人等寐ずの番をなす故、亦爲めに大道を說き聞かすること下田の獄に在る時の如くにして、更に快なり、余生來の愉快、此の時に過ぐるはなし云々。」獄卒罪囚また敎ふべしとした松陰は「平生の志、確然不拔、いよいよ益々同囚と切磋し」よく獄中駸々乎として化に向ふ勢を招來し、司獄福川をして四十年前僧大凝の獄囚敎化以來未だ曾つて今日の盛なしと嘆ぜしめるに至つたのであつた。かく「野山屋敷中學問起り立つ」ことを願ふ松陰の敎化は、罪囚の大半を學に就かしめたのみならず司獄まで彼に名字の說を乞ひ師事するに至らしめたのであつた。まさに獄舍を「獄樂」たらしめ「福堂も亦難からず」とするに至つたのであつた。かゝる獄中敎育は一に逆境裡なほ自ら棄せずその位に素して道を貫かんする志から生れたものであるとともに、また匹夫にも君德を澤せしめる伊尹の任を以て自ら居る松陰の深き人間愛から發してゐる。すなはち捨てられた身を以て捨てられた人を敎へ化する松陰の獄中敎育は、自他への誠實そのものから發してゐる。江戸獄記・福堂策・野山獄記等の著述は獄制改善の熱意から生れてゐる。その伊尹の志よりして、松陰は十一人の囚徒を救はんがためには一身をも捧げんとし、その釋放を見るや、驚喜踊躍、その滿足我身の自由になりし時より甚しきものがあつたのであつた。「人命は至つて重し」とする信念より獄囚に寄せる講孟餘話盡心下篇劈頭の切々たる言葉こそは人間吉田松陰の面目を物語りて遺憾がない。ここでも敎育の根柢は至誠であり深き人間愛である。「盛世一人才をも捨てぬ美意」に徹する人間尊重の精神こそ松陰を獄中の敎育者たらしめたのである。

獄囚敎育の如きは封建人の多く思はざるところである。松陰はこの點ですでに封建制超越的であるが、また女子敎

育に關しても封建制超越的志向を示してゐる。囚徒なほ教ふべきを思つた松陰にとつては、天下第一流を以て自任すべき男子のみならず、女子もまた重大なる教育的關心に價ひするものであつた。松陰においては「節母烈婦ありて然る後孝子忠臣あり」といはれる如く、志士教育の基盤乃至母胎として女子教育が重大視せられたのであつた。獄中囚人の爲めに孟子の會を開いた松陰は、安政二年末免獄幽室の人としても引き續き孟子會讀を續けるとともに、翌三年十月頃は「婦人會」を催し「阿嫂群妹の爲に」武家女鑑等を講じたのであつた。松陰の女性教育觀は武教全書講錄や妹千代への手紙等に窺はれるが、彼の女性教育の關心の眞摯さを語りて遺憾なきものは東行直前安政六年五月十九日に書かれた叔父玉木文之進への訣語である。女性が內にありては髮を亂り形を整へず、徒らに外に出でて笏窕態を成すは本末顚倒も甚しきものと說く此の手紙において、松陰は死出の旅を前にして「閨門は正家の本」といふ女性教育の根本信念以外には何一つ語らぬのである。道と教のために生きる人の眞骨頭はここにも鮮かである。

「閨門は正家の本」となす松陰の女性教育論は武教全書講錄の「子孫教戒」篇に詳しい。その篇の過半を占める女子教育論は次の如く說き起されてゐる。「女子の教戒の事、先師（山鹿素行）の深意尤も味ふべし、夫婦は人倫の大綱にて、父子兄弟の由つて生ずる所なれば、一家盛衰治亂の界全く茲にあり、故に先づ女子を教戒せずんばあるべからず、男子何程剛腸にして武士道を守るとも、婦人道を失ふ時は一家治まらず、子孫の教戒亦癈するに至る、豈に慎まざるべけんや、而して挽近女子の教戒を以て重事とする者あることを聞かず云々。」もつて松陰の女性教育に對する關心の程を窺ふに足るであらう。ことに松陰が素行とともに斥けるのは源氏物語・伊勢物語等の艶讀や遊藝等による教育が女性の心を徒らに淫泆柔弱にすることであつた。貝原益軒の著述や心學本等は女性にすすめるに價ひするものであるが、ここには「柔順・幽閑・淸苦・儉素の教はあれども、節烈果斷の訓に乏し」と松陰は考へ、「柔順を以て用と爲し、果斷を以て制と爲す」山鹿素行の教のみが一圓全きものであると教へるのである。女性の德も「大堅忍・大決斷」にあるのである。武士の立場から女性に柔順堅忍の道のみならず節烈果決の德を要請した松陰は、東行直前

諸妹に次の如く詠み殘してゐる。

心あれや人の母たる人達よ
　かからんことは武士の常

まさに今世の女子に要求せられるものは貞烈の德であると考へた松陰は、澁井大宅編の「責前者草」中の烈女傳や本朝女鑑等を推し、また富永有隣をして曹班昭の女誡七篇を譯述せしめ、女子教育の教材として外叔久保五郎右衞門に提供してゐる。またその「女學校」案の提唱においても、松陰は時代に先驅してゐる。松陰の女子教育のめざすところは、一方で「溫柔寬綏」他方で「節烈果決」、彈力富かな魂の育成にあるといはれる。そのためには觀念的形式的考へ方をこえた心身一如的體得が何より必要である。妹千代に與へた書簡の如きは何れもこの線に沿つて書かれてゐる。すなはち安政元年十二月三日の手紙においては、神信心の「德」を說いて、次の如く教へてゐる、「神と申すものは正直なる事を好み、又淸淨なる事を好み給ふ、それ故神を拜むには先づ己が心を正直にし、また己が體を淸淨にして、外に何の心もなくただ謹み拜むべし、これを誠の神信心と申すなり、その信心が積りゆけば、二六時中己が心が正直にて體が淸淨になる、これを德と申すなり云々。」また安政元年四月十三日には方便中心主義の觀音信仰を說いて次の如く書いてゐる、「人は一心不亂になりさへすれば、何事へ臨み候てもちつとも頓着はなく、繩目も人屋も首の座も平氣になれ候から、世の中に如何に難題苦患の候ても、それに退轉して不忠不孝無禮無道等仕る氣遣ひはない、されど初めから凡夫に一心不亂ぢやの不退轉ぢやのと申し聞かせても、さつぱり耳に入らぬもの故に、假に觀音樣を拵へて人の信を起させ候教にござ候、これを方便とも申し候云々。」更にこの手紙は最後に心學本をすすめ「長閑さよ願ひなき身の神詣で」の一句をあげて「神へ願ふよりは身で行ふがよろしく候」と結んでゐる。更に東行直前にも「平田家訓」を一冊妹千代に與へ「此の教がよく腹に入り候はば、一文あげて極樂淨土へゆくよりましと存じ候」と語り、刑死直前の訣語には「呉々も人を哀しまんよりは自ら勤むること肝要にござ候」と三妹に追伸してゐ

る。

六

かく教育の光は縱には最上より最下まで、横には男女のすべてに及ぶべきである。武教全書講錄で「女學校」策を展開して松陰が次の如く說く所以である、「凡そ生を天地間に稟くる者、貴となく賤となく、男となく女となく、一人の逸居すべきなく、一人の敎なかるべきなし云々。」これは士分階級のみに敎育の機會が與へられてゐた封建時代には注目すべき見解である。すなはち敎育の機會均等を說く點においても、松陰は明かに封建制超克志向を示す先驅者であつたのである。すなはち輕卒・庶子・獄卒・囚人等如何なる人物をもその敎育對象とした松陰は、安政五年の學校論において曰く、「今は學校を以て門地資格の場と爲す、且つ學校は將に天下の人士を待たんとす、何ぞ必しも吾が二國のみならんや、今陪臣・足輕・二國の民、猶ほ且つ入學するを得ず、その規模たる、豈に啖くべきの甚しきに非ずや云々。」かかる見地に立つ松陰は安政五年十月數回にわたり國相益田彈正に「持方打破」論を說いてゐる。高祿高官の子弟と「小身士居寮のものと萬事同樣に」せんとするのである。松陰によれば、持方打破こそは「名敎を維持し學生を更張するの大基」なのである。かく益田とともに「俗論」と戰ひ「寄組の愚持方を打破した」松陰は上述の學校論において次の如き持論を展開してゐる。「大いに國中に令し、學問行義の人に師表たるべき者、志氣機能の學びて造るべき者、その他兵農曆算天文地理諸種の學藝の自ら長とする所を挾ける者を募り、貴賤に拘はらず、淺深を問はず、皆學生に充つるを得しむ、學生は科を分ち、各〻その學ぶ所を學び、縛するに繩墨を以てせず、唯だその德を成し材を達すると否とを視て、これを黜陟す云々。」まさに德を修め學を究め藝を達する萬民皆學主義である。兵學者として國民皆兵主義を唱へた松陰は、敎育者としては萬民皆學主義を說いたのであつた。

上は君候より下は庶民にいたるまで、一人として學無く敎無きを期するところに、松陰の進步的敎育の立場があ

る。性善の哲學を奉じ人といはれる限りのものを愛し尊重し至るところ人性の深みを開發せんとした松陰の教育的立場はまさしく平民主義的である。ヒュマニスト的見地を豐かにたたへてゐる志士松陰の立場として當然の歸結である。志士的氣魄を高調してやまなかつた松陰は教育者として極めて平民的な態度に終始したのであつた。馬島春海が天野御民に語つた入門の印象は次の如くである、「吾れ十六七歳の頃瀧彌太郎氏と共にともに詣り、始めて先生に見え、束修を行ふ、曰く『謹みて教授を乞ふ。』答へて曰く『教授は能はざるも君等とともに講究せん』と。已にして辭し去る。先生送りて昇降口に至る。吾等少年に對してその謙遜なることかくの如し云々。」横山幾太も亦その入門當時の印象を次の如く語つてゐる、「既にして人あり、來り此方へ來るべしと報ず。至れば先生在り、その容貌言語果して人に異なり。先生曰く『勉むべし。』〔言語頗る丁寧なり、御勉强なされられい〕余拜して退き他の室にて例の假名交りの書を讀む。〔七八人もあり〕先生突然余の前に坐し、余が讀む所の書を取り一節を讀み且つ曰く『此の書は常陸帶と名づく、水戸人藤田彪の撰む所云々。』由つて諄々藤田の人となりを說き、且つ……云々と話す。その慇懃なる且つ一も自ら英雄を以て居り人を見る蟲蟻の如くする狀一點も無く、只だ僅かに年長と云ふ迄の如し。余大いに驚き喜懼措く能はず、自ら謂ふ、余は小丈夫一乳臭なり、然るに世の鬼神視し豪傑視する先生の圭角を設けず、傲慢の態を見ざる、諄々人を導くの風眞に掬すべく、これを當時の苟も一經一能に通ずるの士に比するに、啻に宵壤の差あるのみならず、此くの如き先生の薰陶を受けば楞材或は一用を爲すを得べしと。欣然措く能はず、薄暮家に歸り、明日又至る云々。」渡邊嵩藏（天野清三郎）によれば、「先生は言語甚だ丁寧にして村塾に出入する門人の內、年老けたるものに對しては、大抵『あなた』といはれ、余等如き年少に對しては『おまへ』などといはれたり。」「先生は日常禮に厚く又謙遜家であつた、門生の退塾の際の如き、必らず玄關まで見送つて而かも最後に『あれを忘るな』『あれはかくかくせよ』などとの注意を與へられたものである。」「先生は餘程親切な人であつた。年少のものには先生手づから風呂敷包み（品川）を脊負はして大事にかへれと送つてやられた。机を狹むで先生に向ひ勉强すると、先生は筆の

先きで字を突いて丁寧に教へられ、時に無點本などには逆に點を切られることもあつた。又書物の表紙板にそれぞれ適當の教訓樣の文句を書いて渡されるのが常であつた。そして先生は門弟中少々の短所があつても決して捨てられないで必ずその長所を見出して遂にそれでその短所を補充されたものである。」この平民的にして人を容易に棄てざる松陰の教育的態度は彼の根本的主張の一つに屬してゐる。安政二年六月の「福堂策」に曰く、「人賢愚ありと雖も、各、一二の才能なきはなし、湊合して大成する時は必ず全備する所あらん、これ亦年來人を閲して實驗する所なり、人物を棄遺せざるの要術、これより外復たあることなし云々。」まことに天野の語る如く、學者・醫師・畫家・武術家・神官・僧侶のみならず「農工商に熱心又は熟達する者、凡そ一藝一能に秀でたる者は皆先生の家に出入せざるはなき」ところに、松陰教育の大を致せる所以がある。學を究め各自の眞骨頭に生きる限りの人を全體の道において生かさんとした松陰はその志いよいよ高くしてその態度いよいよ平らなる平民的教育者である。萬人を包む博大なる心は約して全體的意志の頂點を志すのである。邦家に殉ぜんとする志いよいよ切なるを加へるとともに、その心は萬人に向つて開かれる。衆庶協和の宏き地平と清明孤高の高き志とは相卽して志士的立場を可能にする。松陰は博約もつて全卽個の志士的立場に徹するにつれて己を貫く歴史の眞理に殉じ、一死もつて眞理の道を證示せんとしたのであつた。ただ六尺の微軀一つを以て起ち上る草莽崛起の立場こそは、理を究め身を以て行ふ道に生きた松陰三十年の生涯の結論であつた。かく單身己の志の高みを攀じ盡さんとした松陰が最後に賴まんとしたものは、封建的特權階級でなく草莽無位の士であつた。萬人にその心をひらいた松陰の教育は最後に死の教育にその焦點を結ぶのである。

七

今や松陰は草莽萬人の士とともに國を新しくする道を一死以て貫かんとするのである。至誠以て草莽革新の道を貫かんとするとき、人は生死の問題に直面せざるを得ない。人間に達し得る限りのものは血肉を以て歴史に描き出され

る。國を新たにして人倫の道を全くせんとする立場に徹するにつれて、松陰は「不朽」の次元を凝視しつつ死の道を深めて行つたのであつた。ここに松陰は死の教育者としてその眞骨頭の全貌をあらはして來るのである。死の問題は松陰學の根本問題の一つであるが、安政六年正月百計挫折四面楚歌の思ひに閉ざされた松陰は「今諸友心死し身死す、吾れにして何ぞ獨り生へん、如かず、先づ死して以て諸友の心を堅ならしめんには、吾れ果して死せば、その心死する者或は更生するものあらん」とし、死のみが究極の道を證し得るとするのである。道に死するは道の不朽に生きる所以である。道の不朽を證するは道に死するあるのみとは、教育者吉田松陰の究極信條であつた。「自ら死ぬ事の出來ぬ男が決して人を死なす事は出來ぬぞ」（圖點は松陰）といひて究極の道を證す死を敢然「我がもの」とせんとした松陰は、刑死の直前安政六年十月二十日入江杉藏に「足下輩も此の後の死所を御工夫然るべく候」と教へてゐる。まさに人倫の行義に死するの志を同じくするが故に、人生究極の眞理を教へ得るのであり教へられ得るのである。ここに生死あげて一につながる同志血盟の團結が可能となる。一死もつて國の道につながる清明の義において志を同じうするが故に、友情血より濃き大和の道が人々の魂を貫いて生きるのである。安政六年二月中頃の手紙に曰く、「僕友義甚だ厚きも他に非ず、國の爲めに一命を抛ちて呉れる人共なれば、氣體血肉皆吾れと連接するを以てなり云々。」かく義と情とが相貫き相會するところに、松下村塾の學風の特色がある。東行直前に松陰が諸友に與へた義理透徹の文章の行間に切々として迫り來る師弟の情の深みを思ふものは、松下村塾の學風の故なくしては與らぬ所以を知るであらう。各己が卓然自立することにおいて大和心交の深みに徹するところに、松下村塾の學風の特色がある。

水戸學と異る松下村塾の學風の著しき特色は、情理相會、自立心交の精神にあるといはれるであらう。嘉永四年末水戸に遊び大なる刺戟をうけた松陰は、水戸學を深く推重しつつも、次の如く講孟餘話において語つてゐる、「余深く水府の學に服す、謂へらく神州の道斯に在りと、然れどもその異端邪說を論ずるに至りては、頗る放豚を追ふに近きものあり云々。」かく考へて松陰は「余や執る所は、孔子の『人にして不仁なる、之を疾むこと已甚しければ亂せ

しむ」の一語にあり」と結論するのである。まことに、伊藤仁齋等の道破せる如く、專ら理義に依りて事を斷じ善惡の裁判のみに急なる春秋乃至通鑑的大義名分論に立つとき、秋霜烈日一毫假借せざる殘忍刻薄の心に墮ち寛裕仁厚の風に欠けるに至るを免れ難きものがある。理一點張の大義名分論に終始した水戸の學風は同藩の陰慘執拗を極めた內攻內紛の歷史に無關係ではない。安政二年の桂小五郎宛の手紙に曰く、「當分水藩・肥藩等の朋黨の患は足下熟知の通りなるが、悅ぶべきは本藩にのみ未だ此の患なく、同德同心君臣一體なるは何より目出度き事なり云々。」國家非常のときに臨みながら徒らに大義名分論の下に相鬩ぐが如きは、名分の形のみありて大義の實なきものである。理のみを以て裁けば、天下一人として全きを得るものはあり得ず、人として用ふるは無きに至るであらう。そしに對し飽迄理義の究明實現を期しながら情の深みに發する仁恕の道を終始忘れぬ松陰は、上にあげた手紙において次の如く敎へてゐる、「天下太平の時なれば、兎もあれ、かかる國步艱難人才拂底の節には一才一能小善小知ものにても皆しき只中に候間、賢人君子の同志打は申す迄もこれなく、假令小人なればとて能あらば、その才能丈けは用ひ盡して、その害に逢はぬ樣に致し度きことにござ候、此の論は今日に始まる事には無之候へども、平生以て同志と御講究なさるべく候云々。」理を爭ひ義をせめる大義名分論のもと同學相食み相打つ朋黨の爭の極、遂には筑波學兵の事を見るに及んで有能の士相つぎて倒れ强弩の末なすところなきに終つた水戸藩學の在り方に對し、松下村塾の同志は師の殉難後もよく淸明大和の學統を生かし文久元年末の「一燈錢申合」における如く協力一致して維新回天の業に參じて重大なる役割を演じたのであつた。

すでに嘉永元年十二月の「兵學寮捷書條々」の終三項は次の如く規定してゐる。

一、他流を毀り候は勿論、惣じて妄りに人を是非長短致し候儀、堅く相誡むべく候事

一、講習討論の節、勝つ事を好むの心を持し、人の議論を排斥し、私の意見を遂げ候儀、深く相誡むべし。專ら義理を明かにする心懸肝要たるべく候事

一、多人數の中には、自然氣性の不同も有之もの候へども、此等の類大概私心より起る事に候へば、互に寛容致し、隔心無之樣相心得、先進を敬ひ後進を導き候儀、肝要たるべく候事

すなはち他を凌ぎ勝を好む私心を慎しみて專ら義理を究め互ひに寛容する和協共進の學風が明確に說かれてゐるのである。その序言にも「假令一技一藝に拔群たりとも、己が才能を誇つて長上を凌ぎ禮法を亂り候輩は、治世にては上の御風化を妨げ、戰場にては大將の法令を破り、治亂共に御奉公の道を知らざる輩と言ふべし」とあるが、松陰が終始極力戒めたものは、徒らに勝を好み他を凌ぐ「勝心客氣」であつた。嘉永四年二月の上書には、武藝者が徒らに「勝を好む心」よりして「不義の勝を取る」ことあるまじきことが說かれ、同年八月十七日には讀書攻學の道において人に一歩も後れまじき己の心構へを說きながら「しかしこれは外に馳せ人に勝を求むる事に相成り深く懲すべき心にござ候間云々」と自戒してゐる。幽窓隨筆中安政四年二月末の部も、爲語に宿る眞理を逸せざらんとした松陰が「辯を好み勝を好むの病」に對し極めて敏感であることを示してゐる。安政五年九月には野村和作に「長者を凌忽し人の疾惡を取るなかれ」と戒めてゐる。まことに勝を好み名を求むるは徒らに意必固我、自他一貫の德に缺け眞に自立し得ざるが故である。安政六年一月二十三日作間忠三郎に敎へて曰く、「人を屈して己れに從はしめんと欲するは、亦特立する能はざるが故のみ、吾れ曾て眞によく特立する者を觀るに、寵辱にも驚かず、毀譽にも動かず、何ぞ更に辯說もて人を屈することを爲さんや云々。」人を凌ぎ勝をとらんとするは眞に自立し得ざるが故である。眞に自ら立つものは自づと己に靖んずるものがあるのである。すなはち己に充ち溢れるものあるとき、人は自ら立ち自ら靖んじ得る。ここにいたれば卓然自立の道は同時に自他一如の道である。淸明にして自ら立つが故に、大和にして共に行くのである。つねに卓然自立の道を說いた松陰は「協心戮力推挽一致以て巨川を濟る」志士心交の道を說き、刑死前四十日の頃も「有志の士は相互に手を引いて大川を渡るでなくては相捌けざる事」を力說してゐるのである。この精神が塾を貫き流れ、久坂玄瑞主唱のもとによく一燈錢を積んで志士共助の實をあげんとする文久二年の申合せともなつた

のであつた。同志が「身の油を絞り出して」點じた一燈こそはやがて維新の曙光ともなつたのであつた。

松陰がつねづね門下に求めてやまぬものは己の眞骨頭に徹して卓然自立する道である。松陰はつねに「公等碌々、所謂人に因りて事を成す」といふ毛遂の言をあげて諸生に獨立獨歩の氣魄を說いたといはれるが、眞に自立し得る者は他を凌ぐことなくして他と共に行くのである。他を凌がんとするものは却つて眞に自立し得ざる者にほかならない。己の眞骨頭に徹し自己の性を深めて自ら立つ者はその德と仁において己を超え自他不二となる。清明自立なる者のみが大和心交の境に往する。ここに人間の道があるのである。「吾れ勝つことを好むにあらず」とする松陰は門下が「將に往いて道に入らんとするを喜ぶ」のである。「學の道たる、己が才能を衒して人を屈する所以に非ず、人を敎育して同じく善に歸せんと欲する所なり」といふ講孟餘話の言葉こそは松陰の敎育精神を物語りて遺憾なきものである。眞に己の德に徹する故に自立するとともに己を超え他とともに道を行き同じく善に歸し、ここに自他一如大和心交の世界が開ける。眞に自立する「剛」の德を缺く故に、碌々人によつて事をなす「慾」の立場に終始するのである。清明自立にして大和心交の道なきところ、己の才能を衒して徒らに意必固我人を凌ぐにあらざれば、碌々人によつて事をなす媚態百出利慾のためには權勢に阿附して恥を知らず、或ひは徒らに大義名分論をかざして殘忍刻薄人を責め遂には學と敎そのものを私鬪の具に化し去るのである。徒らに人を凌ぐは眞の自主性ではなく、碌々人によつて事をなすは眞の社會性ではなく、情理相會ならぬは全き人倫性ではない。眞に自立するもののみが眞に社會的であり、またその道である。自立性と社會性とは情理相會の人倫性の深みにおいて一である。清明大和・卓立心交の學道こそは人倫の精髓にして敎育の本筋である。實に「卓立同盟」とは四字にして一專よく松陰の志士敎育の核心を衝くものである。己の眞骨頭に徹して己を超える天人一貫の場よりして靑色靑光白色白光の自立的主體性を現じ來れば、よく一朝の患を忘れて終身の憂に住しながら智において水を樂しみ仁にして山を樂しみ己に靖んじて人と共に行く大和の統一に入るのである。眞の己をもつが故に、大きく和するのが天人一貫・自他一如の道の極である。安政二年七月十

七日久保清太郎宛の手紙には、「君子は和して同ぜざる、固に難しとなす、而して和最も難しとなす、足下幸にこれを思へ」と敎へてゐる。しかもこの手紙の追伸にも「人にして不仁なる、これを疾むこと已甚しければ亂せしむ」の論語の言葉をあげ、「この言、英雄男兒忘るべからざる事」と書かれてゐる。理のみによりて事を斷せば、大義名分論のもとに相鬩ぎ家國ともに和を失ふであらう。理のみに偏する勝心客氣の立場は遂に全人的立場ではない。情理相會、理において明かに辨ずるとともに情において一に融け合ひ、卓然自立にして大和心交の道に住するのが、全き人間の立場である。安政五年六月の文は俗流に卓立する志士の道を諸生に示すにあたり「之を要するに、學の功たる、氣類先づ接し義理從つて融る」と說いてゐる。理已に明かにして氣相通じ、淸明にして大和、自立にして心交、天人一貫にして自他一如、ここに人倫實踐の極地を見たのが松陰の志士敎育であつた。松陰はつねづね「曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎」といふ論語の章句を門下に唱せしめたといはれるが、至誠攻學以て淸明大和の道に徹せんとしたのが松陰の敎育的立場であつた。卓然自立にして協心戮力、淸明大和の道を全くすることこそ、一死以て國に殉じた松陰が門下に敎へたところであつた。士の志はあげてこの一點に集中するといはねばならない。淸明大和の道は「まこと」の道そのものである。學と敎は已を誠にして天に至ることに窮まるのである。學はまさに已の眞骨頭を求得してその工夫を着くべきものであつた。その故に松陰は「一日も眞ならずんば、其の人救ひ難し」となすのである。すなはち松陰もまた眞の精神の道に與かる人の一人としてその精神の血の最後の一滴まで純なることを自他に求めたのであつた。士の志はその窮極の根柢において純一無雜となるまで深化せられ淨化せられ鍛練せられねばならない。志士敎育はあげてこの一點に集約せられるのである。よくこの一境の深みを人に體得せしめるとき、人は死生を超えて「不朽」につながる歷史的實踐の本質に徹し、その耿々一片、眞心實意の鐵石心はよく人を天地の間に立たしめるのである。人がその蒼溟に點ずる一粟の身を以てしてよく天地不朽に參じ北斗とその光を爭ひ得る所以は、已のすべてをあげて恃むべき何ものもなしとするまでに謙虛にして純一なる至誠の故であ

る。溫恭にして自虛の極、人は天の光に透徹せられ天人一貫的となる。この故に、東行直前松陰は修學二十年まさに而立の身なるにもかかはらず孟子のいはゆる「至誠にして動かざる者未だこれあらざるなり」の一語の眞理性になほ與り得ずとし、今や死生の問題を超えて身を以てこの語の眞理性を檢討せんと、小田村伊之助に書き殘すのである。孟子の語の深みを解せずとするところに、松陰の至誠は無限の深みを示してゐる。しかも上の一文が小田村伊之助に宛てられたことは意味深きものといはねばならない。小田村は質直誠實その「權謀なき所は天地に對すべし」とまで松陰に許されしのみならず、東行直前松下村塾一統の者が「大眼目に相成候一言仰せ置かれ度く候」と問ふた際次の如く名ざされた當の人であつたのである、「村塾、尊堂先生あり、何ぞ吾が言を待たん。塾政の大眼目は唯だ先生を尊奉するあるのみ。」まさしく至誠以て貫かんとする松陰にとつては、至誠天地に對するの士こそ後事を託するに足るものであつたのである。ここに松下村塾を貫く教育の根本精神は明かである。すなはち志士教育は清明心交の至誠に歸して己を無にし天地の道に歸することにきはまるのである。この一境において人は自立心交よく自他相貫の德に住して天人一貫となるが故に「不朽」に參ずるのである。「不朽」は一朝の患に住する人間の心を瞑眩的に超え終身の憂に住する志士の眞骨頭を現成せしめる絶對統一的根源として至るところに現じつつも何處にも住せざるものである。かかる「不朽」に瞑眩震撼せられつつ己の眞骨頭に徹する自立獨歩の士のみが肝膽相照す大和心交の深みに徹し得るのである。こゝでは相互に高まることにおいて競ふ愛、または本來の自己に徹せんとする人々が愛することにおける競ひ、ヤスペルス的にいへば der liebende Kampf が生きてくるといはれよう。「頭のじん〳〵することばかり申し聞かせ」、自己の眞骨頭を求得してやまぬ「終身の憂」に住する全人格的瞑眩體驗を共にする同志的立場に高まり、相競ひ相携へて高まる闘ふ愛の場において「不朽」の何ものたるかを體得せしめんとしたところに、「酒も好まず、色も好まず、酒色に換ゆるに朋友を以てせん」とした吉田松陰の教育愛は極まるといはれる。（了）

後記　本稿は多年中江藤樹・貝原益軒・二宮尊德・吉田松陰・福澤諭吉等日本の教育的天才の系譜を辿らんとしてその時日なきに苦しむ筆者がその舊稿に若干加筆せるものであるが、松陰の歴史的意義については拙著「傳統と反省」を參照せられたい。

ENGLISH OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

The Education of Yoshida Shôin

By Yûkichi Shitahodo

Yoshida Shôin, born in 1830 and beheaded in 1859, was one of the most influential and greatest teachers throughout the history of Japan. Although he has been, and possibly still is, misunderstood to be a fanatic nationalist, he was in reality a man of high purpose and one of the outstanding humanists of that age. His major interest all through his life was to find out a highway for the independent Japan at the critical moment of the nation. In this connection he put a great emphasis upon the need of education as the basis for politics, economics, social welfare, armaments etc. of the country. According to his philosophy of education, everybody should be a patriot from the nationalistic as well as the humanistic point of view. What then was his education in practice? This is the main topic of this article. How did he encourage his pupils to realize themselves? How did he lead his pupils to appreciate their own personalities and abilities, to help and advise one another, and to learn lessons from difficulties and adversities?

He stressed not only the reading of books but also work-experiences in his educational program. For in work-experiences one integrates one's activities and learns how to get along with others and to be generous and tolerant. And one of his most progressive ideas concerning education was: equal opportunity for everybody without the distinction of ranks and sexes; none should remain uneducated.

Thus he did his best to teach women as well, and while in prison, to teach even his fellow-prisoners and jailers. He was always kind and polite to everybody in quite a democratic way. He taught every pupil to be cooperative and congenial to each other, as well as self-reliant and independent. In short, his education was an activity producing among his pupils self-reliance and fraternity. To be competitive with one another in appreciating and fostering fine qualities and merits in oneself and others—such was the first principle of the education which was practised with a brilliant success by this immortal educational genius of Japan.